

# 江戸古川柳特集

## ① 第161回 生涯現役講座講演要

### 演題 『江戸川柳をめぐって』

講師 蕪木秀敏氏

日時:令和年 11月 30日(土) 13:00~14:30

会場:横浜市金沢区 能見台地区センター

参加者: 56名

蕪木氏は横浜市生れ。一貫して教職関係に従事してきた。初任校の北海道の道立高等学校に3年勤務後、昭和36年4月から横浜市立南高等学校に転任、その後は横浜市教育委員会指導主事に携わり、横浜市立豊田中学校（戸塚区）、仲尾台中学校（中区）の校長等を歴任。現在は神奈川県立公文書館、西谷地区センター、東戸塚地区センター等で古典（徒然草、枕草子など）の講座を開く。専門領域は国語、学校図書館教育など。



川柳は俳句と同じ句型をもちながら季語や切れ字といった約束事にしばられず、世事万般、日本や中国の歴史・故事などを自在に詠み、滑稽や風刺を込める文芸である。江戸の町では「前句付：まえくづけ」という言葉遊びが流行した。前句付とは、七七の付句（お題）に、次の五七五の前句を付けるというもので、それに懸賞が付いたことから大流行し実に55万句ほどが残っている。わかりやすい例を示そう。“切りたくもあり 切りたくもなし（付け句）“盗人を 捕えてみれば 吾が子なり（前句付）”を付けるとこのようなかたちになる。

川柳の祖柄井川柳：からいせんりゅうは、享保3年（1718）生まれ。はじめ江戸時代中期のころは前句付の点者であった。柄井家は代々江戸浅草の竜宝寺門前町の名主の家系。通称は八右衛門、無名庵川柳と号した。川柳は雑俳の一

つで、川柳と言われるようになったのは明治になってからのこと。柄井川柳の名は、15代脇屋川柳まで受け継がれた。そのあと、呉陵軒可者という弟子が出てくる。寛政2年（1790）没。73歳。平成元年が200回忌だった。蔵前の天台宗龍宝寺（通称川柳寺）では、毎年法要と献句、句会などが行われる。「点者：てんじゃ」とは、作品の優劣を判じて評点を加える人のこと。江戸文芸の華である川柳の選集「柳多留」は十八世紀中頃から幕末まで一六七編刊行された。岩波文庫5巻に集約されている。

以下実際の作品に蕪木先生の解説を記します。

### 二十五と 四十二で込む わたし舟

厄年の女性と男性が入り混じった渡し舟で川崎大師にお参りをする

### あなたもか わたしも三と 万年屋

万年屋は、江戸時代、東海道川崎宿にあった茶屋。ここでは旅人のほかに、厄年の男女が渡し舟で川崎大師参詣の途中に多数、立ち寄ったので、とくに繁昌した。歌「お江戸日本橋」にも「（前略）六郷（現在の多摩川）わたれば 川崎の万年屋（後略）」とうたわれた

### 呉服店 所々へつるして 手を拭かせ

三越の前身の呉服店では、畳の部屋に客を招き入れ商談をしたという。

### 呉服屋の 繁盛を知る 俄雨

俄か雨で雨宿りする客でいっぱいの呉服屋

### 呉服屋を ささずに出るは 雨やどり

雨やどりの客に傘をかしたが、それをささずに出かけるお客

### 起きて居て 寝たふり酒屋 上手なり

夜間まだ起きている時間に、その店を閉めなくて、寝たふりをする商売上手の酒屋

### 筆まめな 得意に困る 貸本屋

字の上手なお客は貸した本にいたづら書きをするので困る貸本屋

今食えば よしと肴屋 置いて行き

痛みそうな魚は、すぐ食べて食べてほしいと客に届ける

口説かれて またすらり抜く 質手代

質入れにきた侍が出来るだけ高く評価してほしいという言葉にほだされて、  
改めてまた刀の吟味をする

戦いは無いと 見切ったで 貸さぬ也

戦いがなく使いようのない刀を質入れにきた侍に、評価も低くなかなか貸さない

夏大工 裸で足袋を はいている

夏、真っ盛りの大工さんが、上半身裸で足にはすべらないように足袋を履いている

棟上げを 名代の乳母の 尻へ投げ

棟上げ式の際、評判の乳母のお尻をめがけてお祝いの餅を投げる

荒打ちに 目の光るのが 素人なり

壁に細い竹を編んでその上に泥をぬるのを見つづけているのは素人の証拠

今日切りの 屋根屋柳を といて行き

今日で屋根屋の仕事の区切りなので、仕事のさまたげになる柳の木を切るわけにいかず、しばっておいた枝をといて仕事を終えるのを解く

降るばかり でも迷惑な から傘屋

雨が降らなくても、雨の時に役立つ唐傘を干しておく面倒がかかる

三丁ほど つづいたが後家 自慢なり

亡夫の葬儀の列に並んだ後家の得意なようすが光っている（一丁は六〇間、約110m強）

駿河町 畳の上の 人通り

呉服屋の三越の店頭で、お得意さんを畳の部屋にあげて商いをする

九十九は えらみ一首は 考える

九十九首まで選んだが、百人一首の最後の句を選ぶのに自身の歌は考える藤原定家

定家の 門に鶯 鳴いている

定家の小倉山荘の門前には来る。百人一首の中に鶯の歌はない  
にわか雨 昼寝の上にへ ほうり込み

にわか雨になって洗濯ものを昼寝をしている主人に放り投げる  
本ぶりに なって出て行く 雨やどり

有名な一句、なかなか雨があがらぬので、しびれを切らして雨の中を出て行く

うたた寝の 枕四五冊 引きぬかれ

うたた寝をしている間に四五冊もの書物を持って行かれた

うたた寝の 顔へ一冊 屋根にふき

うたた寝している人の顔の上に一冊屋根のように被せる

風呂敷を かぶった明日 蚊帳を出し

寝てる間、蚊が飛んでくるので風呂敷をかぶっていたが、やはり明日から蚊帳を出そう

聞きわけも なく又来ては 蚊を入れる

聞き分けのない子供がおもしろがって蚊帳に出入りしているうちに、蚊が入ってくる

生り初めの 柿は木にある うち配り

まだ熟成していないうちに、柿の近所の配り先が決まる

煤掃に 装束すぎて 笑われる

よごれる煤払いなりにに大げさな装束をして笑われる

取次に 出る顔のない すす仏ひ

煤払い最中に来客があり、真っ黒な顔そのままに挨拶に出る

又今の やうにさといふ 配り餅

近所に配る餅、このような餅がいいのよと口上のお手本を示す

黒白に 二度よごれると 春になり

年越しの煤払い、初春の餅つきで黒白の行事を経て春になる

## 黒犬を 提灯にする 雪の道

雪の夜道を黒犬を提灯代わりに連れて歩む

## おそろしき ものの喰いたき 雪の空

冬の時期にぴったりのふぐを食べたいが、恐ろしい毒が気になる

(編者注：講演が予定時間より早く終了しましたので蕪木先生の講演録はここまでです。)

以下 江戸古川柳の第2部として 次頁以降も合わせてお読み下さい。)

### ② 田辺聖子さんの著書「古川柳おちこぼれ」から

作家の田辺聖子さんに「古川柳おちこぼれ」という著書がある。彼女は「古川柳を読んで創作意欲がそそがれる。人間を見る目のあたたかさを養われる気がする。意気消沈したときも憂鬱なときも、古川柳のもつおかしみで慰められる気がする。江戸時代の酷烈な言論思想統制のもとで古川柳の作者は、告発の刃を人間の内部に向けた。川柳というものは、男性的発想の産物であり、われわれ女性が馴染むことにより、思考のバランスがとれているような気がする。というより何よりおかしく、やがて悲しき世界になるのだ。この「悲しき」は「愛しき」といってもいいでしょう。こんな素晴らしい宝庫をほうっておく手はありません。しかし古川柳というものはもともと二つの意味でわかりにくいのだ。一つは江戸時代の風俗人情、習慣に通じていないと、句意を察することが出来ないもの。また題材になっている歴史的エピソードや、謡曲、口碑伝説などがもともとなっているものも、その方面の知識がないと、いくら読んでも首をひねるばかりだ。以下いくつかの作品をご紹介します。

### かみなりを まねて腹掛け やっとさせ

今の子供に「雷さんにおへそを取られるよ」といっても怖がる子がいるであろうか。今の幼児の親、二十代の人々でさえ、そういういい伝えがピンとこない人が多いだろう。腹掛けというの、今はない。ロンパースなどというのが、寝冷え知らずというのか、今の幼児はみな、自動車の整備工スタイルであるが、私の子供時分、まだ幼児の腹掛けはあった。男の子のするものであって、形としては節句人形の、マサカリをかついだ金太郎サンがしている、エプロンのよ

うなものである。三角巾をちょうどおナカにあてて、紐をつけ、背中と首の二個所、うしろで結ぶ。おなかに、金太郎にあやかって丸(金)と染められたりして、裕になっており、夏のあつい盛り、保温すべき頃だけは包み込むように考案されている。いったい、昔の着物というものは、夏の甚平といい、幼児の腹掛けといい、今の服装よりはるかに合理的で、風土に適した機能性をもっていた。冬の綿入れ、でんち、職人のももひき、みなすぐれた高度の服装文化である。それはさておき、雷が鳴るとおへそを取られるという迷信は、夏におなかを冷やしてはいけないという衛生的見地からもまことに都合よくできている。母親やお乳母どんが「ゴロゴロ・・・ほうら、雷さまだ、おへそを取られるよ、こわい、こわい」と身振り手振りでおどして、逃げまわる子供をやっとつかまえ、腹掛けさせる。男の子の、二つ三つ、か、スルスル逃げて、走りまわって中々つかまらない。裸ん坊が大好きなので、キャッキョといいながら、すばしこく逃げまわり、尻の重いお乳母どんなどは難儀する。平凡な情景ながら、あたたかい句である。こういう子供の生まれたときは

#### 取上婆 屏風を出ると とりまかれ

ということになる。屏風で囲った蚕室、オギャーという声で、すわ生まれたとみんな色め

き立っていると、お手柄の産婆がにこにこして出てくる。男か、女か、五体満足かと、待っている人々は産婆をとりまく。これは庶民の出産風景で、これがご大身の武家であると、<お里まで馬も早々のご注進>となる。奥方のご実家へご安産の使者が立つ。またこれが最も悲惨なことになると、<拍子木で捨て子の股をあけてみる>夜廻りの火の番にみつけられて「捨て子か？男かい、女かい」と拍子木で股をあけられたりする。全く世はさまぎまである。

#### 国の母 生まれた文を 抱き歩き

故郷の母親は、江戸に嫁入りした娘から、子供ができたという手紙を受け取ってうれしさに、手紙を抱き歩き、会う人ごとに吹聴しているのである。昔のことだから、新幹線に乗って見に行くわけにいかないのだ。国の母は、ああか、こうか、思えがき、手紙がボロボロになるまで繰り返し読み、人に飽きがられるほど語りつくしたことだろう。

#### ぶりがれん まねるで孟母 <sup>たな</sup> 店を替え

ご存知教育ママの母のことである。孟母三遷の教えとって、はじめ墓の近

くに家があったので、小さい孟子は葬式のまねばかりして遊ぶのに母は憂慮し、居を市場の近くに移した。今度は孟子は商売のまねばかりして遊ぶ。これはならぬと学校近くに移すと、子供は見習って勉強するようになった。賢母の代表とされる孟母であるが、川柳では、こういう御仁を親愛をこめてからかうのが大好きである。「ぶりがれん」というのは商売人の符牒である。肴屋や野菜屋などの使うもので、ブリは二でガレンは五だという。大阪商人の世界の、ほんの一部をかいまみただけの私だが、符牒は職種によって違うようだった。金物屋、乾物屋、それぞれのものをもっているらしい。私が今覚えているのは、二十二という数字をテンナラというものである。なぜかわからない。二十二の女は美しく天まで鳴らすからだと店の大将は言っていたが、まさかオナラするわけではあるまい。買い手の前であからさまに原価がいないので符牒を使う場合は、その店独特のものもある。孟子は影響をうけやすい子供らしく、たちまち周囲に感化され、「買いなは一れ、買いなはれ」などと身ぶり手ぶりよろしく、符牒まで覚えてしまったのであろう。孟母は商人を軽蔑しているから、深く憂慮するわけだ。こういう賢母を、商売人はユーモラスに感じるわけである。何べんも転居するので（又頼みますと車力へ孟母いひ）引越し荷造り運送業のおっさんに、孟母は頼みに行っている。中には後家の孟母をくどく男もあつたとみえる。実に阿呆な奴、どだい教育ママに色気のあるのなんかいないのをみてもわかるのに、言い寄って果たしてやられている。

### 蕪入りが 帰ると母は 馬鹿のやう

何をいっても母は、そうかそうかと笑ってばかりいる。おろおろして子のまわりをうろつき、見るたびに面変わりし大人っぽく成長してゆくわが子に涙ぐむ。涙ぐんだかと思うと笑い、まるで馬鹿みたいになっている。病気はしないかえ、旦那衆や朋輩衆に可愛がられているかえ、いちいちうるさくいい、あれもこれもと、子供の好物をつくる。直截で単純であるが、それだけに、ずばりとついた句である。男の子は丁稚、女の子は行儀見習いの女中にゆくが、これが品下がると、女の子は六つか七つから遊里で養われるようになる。女の子はごく小さいうちに吉原などへ売られると禿かむろになる。禿というのは、六つか七つからせいぜい十二三までの童女で、遊女の身のまわりの用をする給仕のようなものである。これも長ずると一人前のおいらんになるのである。禿は上等のおいらんだけにつく専属小間使いである。吉川英治氏の「宮本武蔵」にも禿はちょっと出てくる。いったい吉川さんの小説は、ちょっと出てくる、つまち点景

人物がとりわけよく出来ていて、ワンシーンなのに忘れがたいというのが多い。吉野太夫の禿だったか、武蔵が大きな妓楼の廊下でふと道に迷い、うろうろしていると、小さな愛らしい禿が出てきて「ここから先はお客様が入ってはいけません」と袂をおさえるのである。華やかな座敷とうらはらな、帳場内の舞台裏を見せまいと子供心に、目にケンをふくんで立ちほだかる、その様子がほんの数行かかれていて面白い。

### 五右衛門は 生煮えのとき 一首よみ

五右衛門はどうやら実在の大泥棒だったらしい。文禄3年（1954）三条河原で豊臣秀吉に処刑された。子供と一緒に釜茹でされたことになっている。五右衛門は、大釜の下を炊きつけられたとき、子供をかばって上へ差し上げた。しかし段々熱くなってきて、これはたまらぬと、つい子供を下へ敷いたという話もある。ウワサというものは、尾ひれをつけておもしろおかしく広がっていくものである。そうして、エピソードというものは必ず「そうかもしれない」と思わせるところがあり、「彼ならやりかねない」「そういう場合ならやりかねない」という、人をうなずかせるものがあるのだ。そうして架空のことが、さもあるべしという感じで、説得力をもってくるから面白い。この句の「生煮え」という日常次元の語がおかしい。エピソードを知っている我々としては、子供を下に敷いて、下半身茹だって生煮えになりつつ、みやびやかに一首よむという、残酷とナンセンスがいっしょくたになった句である。それを救っているのが「生煮え」という卑俗な日常語である。五右衛門ではおかしいことがある。ときどき上方の古い家へいくと、窓や戸口の上、天井に近い部分かに細長い紙片を貼ってあり「十二月 十二日」という文字がよめる。これは逆さまに貼ってある。この札、泥棒よけのおまじないで、十二月の十二日の当日書いて貼っておく。毎年、十二月の十二日に新しく書いて貼りかえる。これは五右衛門が処刑された日だというのである。そうして逆さまに貼るのは、天井から泥棒が入ってきた場合、よく読めるようにだという。（今日は十二月十二日やぞ、どんな日か知っとるのか、あんたたちの大先輩の五右衛門が釜茹でになった日やで、泥棒なんかしとったら、みんな最後はああなるねん、わかったら早う帰り）何やら上方人らしい、厭味と皮肉があるが、昔の泥棒はこれを読んで踵を返したであろうか。



## 去ったあす ものをさがすに かかって居

女房が離別して里へ帰ってしまうが、あとに残った男、どこになにがあるやらさっぱりわからず、物を探すのにかかっている。腹立ちまぎれの舌打ち、むしゃくしゃしてそれが余計に女房への憤懣をつのらせる。一人で物にやつあたりして「うぬ、畜生、どこへしまいやがったのだ」と手当たり次第にひきあげ、はね返し、そのうち時間はたつ。腹は空く」「勝手にしやがれ」とひっくり返っていると、去ったはずの女房が、仲人といっしょに、おずおずと顔を出し「お前さんー」などという。「何だ、三行り半を取りに来たのか」といいながら何となしホットしたりもしている。仲人が割って入り「話は聞いたが、まあ、ここは何だひとつ仲人に免じて」などととりなししてるが、それより探しものを見つけるのが第一、あれはどこへやったとどなりつけると「まあ、こんなに散らかして。お前さんここにあるじゃないか」女房というものは魔法のように目の前から出してみせるものである。「バカッ。もっとよくわかる所へおきやがれ」と捨てぜりふして仕事に出かけていってしまう。女房の方は、引き散らかったものを片付けるのに夢中である。女というものは、なぜか汚れものを見れば洗いたくなり、散らかっていれば片付けたくなるクセがある。(当今の女たちはこの限りでないようだが、江戸の堅気の内儀、女房、嬢というものはそうだったろう)せっせと掃除をはじめ、仲人は「じゃ、いいね。わしは帰るよ。また何かあったら来るがいい」とうやむやに、にこにこして帰ってゆき、もとへおさまる。まあ、この句にはおさまるとは書いていないが「物をさがすにかかって居」という表現が、男の真理状態を暗示しておかしい。

## 手を出した 方が負けだと 下馬で言ひ

江戸城の供侍部屋で議論沸騰したのであろう。「喧嘩両成敗でござろうか」「いや、それも下手をすると、あとへつくものがどう出るかもしれぬ。一大事となり申すぞ」川柳子は(その晩に雀が出るし鷹も出る)とさっそく、やった。雀は、米沢・上杉家の紋、周知のごとく吉良コウズケ氏のむすこは上杉家の養子になっており、吉良家のあと押しは上杉家である。片や、浅野タクミ氏は、たかだか赤穂五万三千石だが、その本家は芸州広島浅野本家、四十二万石、この紋は鷹である。雀が吉良の加勢をすれば、やわか、鷹もタクミ氏に加担せずにはいられようか。不気味な緊張、庶民はハッケヨイヤ、というところである。しかしまあ、何といっても浅野サンはお坊ちゃんである。なんの五万石、家がなんだと、一瞬の癩癩にすべてを賭けてしまう。路頭に迷わされる失業した

家来は、こまったものであるまい。だが、その稚なさ、短慮は、世俗の垢にまみれたおとなたちにとって永遠のノスタルジャである。かくて浅野タクミ氏は短慮と軽蔑、憫笑されることなく、却って日本人に愛されるのである。

もしこれがイギリスあたりであると、浅野サンは愚者の見本のように言われるのではないかという気がする。しかるにわが川柳子たちは、浅野サンを愛するあまり、揶揄してはばからない。

### 大三十日 首でも取って くる気なり

掛け取りが血相かえて集金に廻るのを、支払う方も迎え撃つべく必死の作戦。越後屋にこれだけ払って、伊勢屋にはこれだけ。三河屋は春のことだとやりくり算段、火の車である。まさに商人にとっては一大作戦。関ヶ原の戦い。武士は打物とってたたかうのと、かわらぬ大晦日のやっさもっさである。首がまわるはずはなかろう。それが町人というものである。どうせ先方の打つ手はみえすいている。居留守するんですよ、ウチの人。いま集金に廻ってるんですけどねえ、とおかみさんが言い、西鶴の小説にある若い手代のように「それではしばらくお待ちしましょう」としおらしく待っていて、これが粘りやでいっかな帰らない。家の内に隠れひそんでいる亭主も困ってしまったりするからおかしい。大晦日は町人にとって切実な生活の区切りであった。泣くも笑うもこの一日、首くくりの出るのも狂言自殺、破産が出るのもこの日のことである。

### 花の山 ぬいたぬいたが あらしなり

(何事ぞ花見る人の長刀 去来) 花見に浮かれるさんざめのたのしい一日。鐘は上野か浅草か。上野の花は盛りがみごとだが、寛永寺に宮様がいられて、夕暮れのしめ出しが早く、三味線も鳴らせない。飛鳥山などへ行って、弁当をひろげ、花見小袖を着かざって飲めや唄えや大そうどう。その中に「抜いた 抜いた」と人がどよめいて逃げ散る。野暮な話で、これが花にふく嵐だろうか。私が聞いた話だが、ある町の花の名所、満開の花の宴のもとで、会社の慰安会があった。初めは仲良く飲んでいた中に、些細なことから口論となり、はては取っ組み合いになり、そのうちの男一人が茶店へ走って行って、茶店の婆さんから出刃を借り、同僚を刺殺して、その場から引っ張られていった。あとへ残った被害者と加害者双方の妻が、相擁して泣き崩れていたということである。町のうわさの焦点は茶店の婆さんで「なんで出刃をわざわざ貸してしまったんやろ」とふしんがっていた。血相かえて飛び込んできた男に出刃を持たせるとは、どういう了見やってんやろ。とみんな言い合った。婆さんは警察へ引っ張

られたそうである。この句の時代は、サムライという野暮なのがついて人斬り包丁を携えてうろついていたのだから、どんなことになるかわかったものではない。町人は「ソラ抜いた抜いた」と逃げるにしかず、である。

最近、世の中を騒がせた「花を見る会」の招待者をめぐる疑惑は解明せぬまま年を越した。

政権、与党はこれで逃げ延びる魂胆であるが、「招いた 招いた」という招待者名簿は廃棄した、シュレッターにかけた、データの復元はできないと隠蔽が明らかである。「虚弁・詭弁の山 招待者名簿」。招待書を麗々しく飾ってシステム販売の悪徳業者が、信頼できる相手と信じこませ、更に被害者を増やしていったのである。安倍総理は個人的な付き合いはないと、関係を否定しているが、3千人ものサクラ的招待者の多くの人と個人的に知り合いのわけがなく、その同列にある刑事告発されている人間を何故招待したか答えていない。

### 泣きなきも よい方をとる かたみわけ

悲哀と欲のつっぱりを笑っているが、泣いているのはこの際女であろう。かたみわけしているのは着物であろう。女と着物は、執念とか業とかで片付けられない因縁で結ばれている。片目で泣きながらも、片目で、いい方をとらないではいけないのである。男が、女を見て笑っているのであるが、その笑いには、嘲笑はない。内側で、女の性、ひいては人間の物欲に対し、感嘆これ久しゅうしているていのおかしみがある。

とうとう誕生から死ぬところまでできてしまった。いずれも分かりやすい句ばかり選んだつもりだが、川柳というものは一読すぐ、口元がほころぶようでないと思ふ。熟読玩味して句意が通じるというのでは、気がぬけてしまう。川柳はビールやサイダーと同じで、ぽんと栓を抜くや否や、すぐ美味しい！とならねば嘘である。

### 武さし坊 とかく支度に 手間がとれ

古典の授業というものはおよそ面白くなかった。戦時中なのでかりにも色めいたところでや恋歌などは教科書から省いてあり、くぐくしい花鳥風詠、退屈な情景描写、難解な古文書ばかりで、ためいきとあくびの出そうな時間であった。それが古川柳のくだりに掛かると、いっぺんに私には面白く思えた。そうして先生が、なんの感動も興味もなく、逐語訳するのを「わかってないな」などと思っていたのだから、なまいきな生徒ではある。歴史句は、その歴史的背景の智識さえあれば、別に人生経験もいらず人情の機微に通じていなくても、ある程度鑑賞できるのだ。学生にとって、歴史句が面白かつ

たというのも当然であろう。古川柳には歴史句が多い。川柳研究家の山路閑古氏は岩波新書「古川柳」の中で、言論の自由を認められぬ封建の世、政道の批判や、上司の誹謗を公表できぬため、選句に意を用い自粛したと述べている。柄井川柳の選出句について言えば、選者が歴史句を最も多く採っているのも、一種の安全策と見られる。よしんば裏で何をいおうとも、史上の事実であると言えば、申し開きが立つと考えられたからであろう。私はこれに加えて、史上の有名な人物、尊敬される人物、お手本、忠臣の鑑、貞女烈婦人賢母、豪傑勇士を、ナミの人間のレベルに引き下ろし、張りボテの権威を、さながら噴霧器でシュッと蠅を殺すごとく蹴散らかし、平俗に卑近に扱い、シャレのめす。そういう作業が古川柳の体質の一つだと思って居る。汝本来人間なり、何をそう偉ぶらなあかんねんという、したたかな精神の居座りが見える。しかしそれは封建治世のもとにあっては、むろん供笑して大っぴらに揶揄し、批判できるものではない。屈折し、反射して出てくるから一読、思わず人のおとがいを解くようなおかしみになる。歴史句の中では、源平時代に関する句がかなり多い。武蔵坊弁慶はいうまでもなく、その中の立役者である。この男は、目に立つほどの大男である上に、武器をいっぱい身につけて出陣する。七つ道具というのは、鉄熊手、ち鑓、大鋸、鉞、突き棒、指叉、袖がらみであるらしい。この前句が「かざりこそすれすれ」であるところから、閑古翁の解釈がおかしい。「大工道具を一括して背負うのと違って、やはり旗指物の一種だから、体裁よく並べる必要もあったのでであろう」と言われる。主人の義経の方は、大將軍のこととて鎧を着るが、それとても義経の方が身支度が早い。早や出陣の法螺貝、太鼓は勇ましく鳴り響いているというのに、まだ弁慶はヤッサモッサして、鑓をここへさそうか、鉞はこちらへかいこもうかと、難儀している。「弁慶、まだか。早ういたせ」「はっ、ただいますぐ・・・」「お前の支度は手間がとれるのう」「申し訳ございません」この古川柳が好んでとりあげられるは、豪遊無双のくせに、女ぎらいだったという伝説があるからである。川柳作者、やわらかのこの弱点をみのがすべき。(なぜだえと 武蔵静かに なぶられる) 女ぎらいの弁慶は、ご主人の義経が、静御前を寵愛しているのが目障りである。静御前の方は、弁慶の女ぎらいをからかって、どうしてなの、などと言うたであろう。しかし、弁慶は、若かりしころ、播州の書写山円教寺での修行中に、ある女と契ったのが最初で最後だったと言われる。(文責 門口)